
どうする、私！

ましろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうする、私！

【Nコード】

N5438Y

【作者名】

ましる

【あらすじ】

ある日の学校の帰り道。近所の公園の傍を通りかかったら自分好みのイケメンに声をかけられた。「鬼ごっこしよーぜ！」あ、ハイ…ってキミ小学生なの！？

ノリと勢いで書いてます。

あ、むり。と思ったら即引き返す方向でお願いします。

書くの初めてで、色々よく分かりません。ご了承ください。

〇〇 はじまり(前書き)

初投稿です。よろしくお願ひします。

00. はじまり

目の前には1人のイケメン。

「…おれじゃ、ダメ？」

…、鼻血出そう。って、いやいやいや。コレは一体どういう状況？
思わず口元に手を当てつつじつと目の前の青年を見つめる。正確に言えば青年ではなく小学生なのだが、彼を初めて見たときは誰もが高校生か大学生ぐらいだと思っただろう。それもそのはず、彼は小学生にして身長172センチ。私も162センチと大きい部類に入るのにそれよりも高いのだ。道を歩けば誰もが振り返る、そんなイケメンなのだ。だけど中身はしっかりか？（無邪気な子供。まあ、多少マセてるというか自分の外見の魅力を上手く使っている気がする）
ないでもないが。

そんな彼に私は今、告白をされている。

「早苗…」

名前を呼ばれて、はっとして見ると少年は不安そうに、端正な顔立ちを歪めていた。

そう、彼はイケメン。美少年なのだ。しかも私の好みというね！ああ、どうしよう。私は決してシヨタではないのに。いや、見た目はシヨタじゃないから…どうなんだ？ああ、もうよく分からんっ。

思わず頭を抱える。そしてちら、と目の前に立っている少年を見る。

くそ、かっこいいな…！！

と悶えているとちよん、と服の裾を引っ張られる。ん？と思って服を引っ張っている人物を見ると心なしかうる、と瞳が潤んでる気がする。

……っこの小悪魔め！ああもう本当にどうしよう。

と考える頭の片隅で、この少年と出会った頃を思い出していた。

…

〇〇・はじまり（後書き）

はじまりましたー。

01・出会い

その日はちょうど2学期期末試験最終日だった。午前中で終わり肩の凝る緊張感から解放され家までの帰り道を歩いていた。空には雲一つない見事な晴天。太陽と地上を遮るものがなくて眩しい。風は冷たいけど日差しがちょうどいいぐらいに暖かい。

なんか、気持ちいいな。ちょっと遠回りしていいこう。

んー、と伸びをしてから気まぐれで思い立って足を家とは反対方向へ進めた。

ぶらぶらと適当に歩いていたら公園にたどり着いた。中央には大きな噴水があり、結構広い。人は平日の昼間だからか少ない。

へー、こんなところに公園なんてあったんだ。

そう思いつつ少し休もうとベンチに座る。ふー、と息を吐いてからふと思いついてカバンからお弁当を取り出した。

今日はお母さん出掛けるって言ってたからお昼ご飯は自分で作ったお弁当！自分の好きなものばかり入れたから早く食べたかったんだよねー。早弁しようと思ってたのに、テストに必死すぎてすっかり忘れてたや。お腹空いたし、ちょうど良いから食べようって。

1人でいそいそとお弁当をひろげて、いただきまーすと手を合わせて食べ始めた。

うんめー。湯葉巻き最強。

はうう、と声を漏らし幸せに浸っていると複数の視線を感じた。

……変人に思われたかな。そうですねキモいですよね、1人で、はううとか声だしてゆんだ顔晒して…うああああ

焦って顔を引き締めて周りにそろりと視線を動かす。すると目の前でしゃがんでいる男の子と目があった。

うわあ、キレイな子。

さらさらの髪、太陽にちょっと透けててキラキラひかっている。色素が全体的に薄い感じ。茶色の髪と瞳。ぱっちりとした二重に小さい顔、白い肌。

「…それなに？」

「！？」

思ったより少し高めの声に話しかけられて思わず後ろに後退りした。

え、なにこの状況！てかさっきから見られてたよね！？うわ、絶対変な顔見られてたよ！ハズカシー！ってちょっと待て、何コレ！？

「ねえ、それなんていう食べ物？」

「え、コレ？」

「うん」

「湯葉巻き」

「湯葉？」

「うん」

湯葉という言葉が聞き慣れないのか、少し首を傾げる彼。それから彼と私の無言の闘い（？）が始まった。

「……」

「……」

「……」

「……食べる？」

「……いいの!？」

早くも負けを認めた。

だってあんな食べたそうに見つめられたら降参するしかないじゃないか。

「……どござ」

苦笑いしつつ、お弁当と箸を彼に渡す。彼は箸を受け取ると恐る恐る湯葉巻きを口へと運んだ。

「……おいしい」

「でしょー」

目をきらきらさせ美味しいといった彼に私はふふん、と自慢気に答えた。

「これ、自分で作ったの？」

「そうだよ」

「へー、すごいな!」

なんて話してたら、彼を呼ぶ声がした。

「おーい、朔弥!なにしてんだー?早くこっち来いよー」

「あ!悪い、今行く!」

声をするを見ると小学生ぐらいの子たちが数人ちよつと離れたところに集まっていた。

「湯葉巻きありがとね、おねーさん!」

がばつと立ち上がってお礼を言う彼。身長が高くて凄く迫力がある。

…おねーさん?……。

どう見ても同じ年か私よりも歳上だろう。

「おねーさんも鬼ごっこやる?」

「あ、ハイ……」

いきなり聞かれて思わず頷く。

「じゃ、いこー!」

「ちよつ、と待って!まだお弁当あるしっ…ちなみに!」

そう言って手を掴んでくるから慌て引き止める。

「ちなみに?」

「キミいくつ?」

「おれ?11歳!」

……やっぱり年下なのか!てか、えええええ!?!その外見で?うわ
ああ

「詐欺!」

「え!」

「あ、ごめん。気にしないで」

「ええええ」

驚いて思わず口が滑ってしまった。

いかんいかん、落ち着け自分。

「ひどいなあ、詐欺だなんて」

「うっ、ごめんね」

思わず言ってしまった言葉に反省する。

「…明日、」

「明日?」

「おれにお弁当作ってきてくれたら許す!」

「えっ」

「…だめ?」

…うっ。早苗は100のダメージをくらった。

「わかった」

そういうと、ニコと笑って約束！と言いながら手を振って友達の方へ走っていった。

01・出会い（後書き）

どれぐらいで話を区切った方がいいのか分からない…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5438y/>

どうする、私！

2011年11月20日11時24分発行